私の名を呼ぶまで

剣崎　月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の名を呼ぶまで

【Ｎコード】
Ｎ３７６３Ｚ

【作者名】
剣崎　月

【あらすじ】
とんでもない理由で皇子と結婚することになった【私】冷静になった皇子は【私】の処遇に困っているようだが、理由が理由なので優しくして差し上げるつもりはない……さて？　【私】はどうなるのだろう。

［01］アメリア，イザベル，シャーロット

「アメリア、用意はできたか？」
用意はできておりますが、私の名前はアメリアではありません。皇子にとってはどうでも良いことでしょうがね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私は小さな国の王女さまに仕えていた。小間使いなどの傍仕えではなく、掃除や洗濯などの力仕事を任されるほんとうの下っ端。
私が仕えていた王女さまは、王女さまだったが目が覚めるような美女とかそういう人ではなかった。
どんな王女さまだったのか？　側で仕えたことがないので分からないが……向こう見ずな所がある王女さまだったらしい。そのせいで私はこうして皇子の隣に立つはめになっている。
王女さまは騎士と恋仲になり、婚約が整っていた皇子との結婚を嫌い駆け落ちした。
まさかそんな事をするとは、王も思っていなかっただろう。
王女さまが駆け落ちするとき、私はたまたまその場に居合わせてしまい、騎士に殴られて失神した。仮にも騎士がか弱い下働きを殴るとは……。
殺されなかっただけありがたいと考えるべきか――手足を縛られ猿ぐつわを噛まされて、暗がりで目覚めた時にまずそう考えて自分を慰めた。
王女さまと騎士が駆け落ちしたのは、皇子が王女さまを妃として迎えにくる前日。
大国の皇子が王女さまを迎えに来たのは、王女さまに興味を持っていたからではなく、別の用事があって、たまたま帰り道に王女さまがいるので連れていくことになっていたのだそうだ。

私は暗がりで”誰か助けて”と考えながら唸る。そこにやってきたのが皇子が連れてきた王女さま付きの侍女。その侍女に助けられ、「どうしてこのような所に？」

当然の質問をされたので、ことの経緯を告げた。

その時私は、王女さまが騎士と駆け落ちしたことを知らなかった。最後の逢瀬くらいに考えていた。それはそうだろう、王女さまが嫁ぐ先は大国で、下手な行動をとれば国が危ないことくらい私でも分かる。

分かっているはずなのに駆け落ちをしたのだ。

閉じ込められていた私は知らなかったが、王たちは王女さまの代理を立てていた。もちろん皇子には教えずに、顔や雰囲気が似ている従妹の姫を王女ということにして。

皇子は王女さまに興味がなかったので、従妹とすげ変わったことに気付きはしなかったらしい。まさか王が従妹とは言え、偽の王女を妃として送りだすとは思っていなかったこともある。上手く誤魔化せそうだったのだが、そこに侍女が私を連れて乗り込んだ。

侍女の言葉に青くなる従妹の姫、そして王。

睨んでくる王女さまの乳母に、大臣とか、とか。

室内は緊迫し、そして私は皇子の国に身柄を拘束された。殺される恐れもあるから……とのこと。

結局事実が明るみに出て、皇子は激怒した。

王が謀ったことを怒ったのか、王女が駆け落ちしたことを怒ったのか？　侍女は皇子が怒った理由は王が謀ったからだと言った。

王女が駆け落ちしたことを正直に告げ、その上で従妹の姫を「従妹の姫」として紹介し、妃にするように勧めたら皇子は怒らなかったと。

王は娘であろる王女が駆け落ちしたことに激怒したと考えていたらしい。

皇子のプライドに傷をつけたと。両方だったのかもしれない。ともかく怒った皇子と、怒りを鎮めて欲しい王。
そして皇子は常軌を逸した行動をとった。

「イザベルを妃として迎える！」

イザベルって誰やねん？　と思ったのだが、皇子の指は私を示していた。よくよく考えたら、あの場に下働きの私が連れていかれた時点でおかしいわけだ。
王としては下働き一人で皇子の怒りが収まるのならば安いというか……拒否できる立場ではないので私は皇子の妃になることが決定した。

国民は驚いていた。私だって驚いている。結婚するのは王女さまだと誰もが思っていたのだから。驚きと情報不足からひどい噂が立った……皇子の国に到着してから知った。
皇子が私に一目惚れをし、様々な苦難を乗り越えて国へと自ら迎えにきた――と。

この残念過ぎる容姿の私に大国の美貌の皇子が恋したとか……信用されないだろうと思ったのだが、そういう話が好きな人が一定数いるようで、その一定数に非常に声が大きい人たちが含まれていたらしく、皇子が恋した町娘という不思議なポジションに収まることになってしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私は非常に普通の顔立ちをしている。
どのくらい普通の顔立ちをしているかというと、
「シャーロット」

皇子が名前を覚えられないくらいに普通の顔立ちである。隣にいるあの時助けてくれた侍女が曖昧な表情をする。
彼女、最初の頃は「皇子もすぐに名前を覚えますので」「皇子は名前を覚えるのが苦手で」とフォローしていたのだが、さすがにそれも言えなくなる程に皇子は私の名を間違う。
覚えて欲しいと思ったことはないのだが、覚えないと彼女の胃にきそうだなと思うのでできることなら覚えて欲しい。
私から積極的に動くつもりはないが。
皇子は私と会話することはない。一方的に告げて立ち去る。
共通の話題もなにもない私にとってはありがたい。私は隣国の皇子のことなど詳しく知らない。名前すら知らなかったくらいだ。
いま私が皇子について知っていることと言えば、皇子には兄と弟がいる。この三人兄弟と従兄弟の公子さんの四名の誰かが次の皇帝になる。最有力候補が皇子なのだと。
侍女は、
「皇子が皇帝に立った暁には、皇后ですよ」
言われるが、なりたくはない。
だが残念なことに私は皇子の正式な妃である。
どうも本当は違う人が正式な妃にしようとしていたらしいのだが、あの騒ぎでこの状況。皇子が正式な妃にしようとしていた女性は、側室の誰かだった……らしい。

伝聞ばかりなので”らしい”が続くが、詳しく知ったところでどうにもならないので”らしい”だけで充分。

どうしようもない理由で皇子の妃となった私、そして皇子には側室がたくさんいる。側室には私の故国よりもずっと大きな国の姫さまもいる。
「どうしてあなたみたいな、普通の娘が妃に選ばれたのかしら」
”それは憤怒を拗らせた結果です”とも言えないので、私は黙っ

て俯く。泣いているのではなく、笑いたくなる気持ちを抑えるために。

大国の姫さまからはわざわざ足を運んで嫌味を言ってもらえるくらいには嫌われている。私は正妃で、皇子の妃のなかではもっとも身分が高いので、大国の姫さまが出向かなければ会うこともないので、こうやって頑張ってやって来てくださる。

生産的なことに時間を費やしたらいかがですか？　思うが、側室の生産的なこととは、夜のお勤めだけで、あとは消費行動のみだ。

高い陶器のティーセットに、紅茶の葉に、小麦粉と砂糖と卵で錬成した毎回違う菓子に、果物と砂糖を鍋にぶちこんでとろとろと煮てかき混ぜたものなど。

私、紅茶より珈琲のほうが好きなんですけれどね。

大国の姫さまが嫌味のつもりで言っている台詞は、皇子からも聞いている。

「あの時自分はどうにかしていた」

言わなくてもいいです。それは私も侍女も思っていることですから。

［02］シュザンナ

皇子が冷静になっても周囲はなかなか冷静にはなれないようです。でも周囲を責めることはできませんよね。悪いのは皇子ですから。

「シュザンナ」

シュザンナって誰やね？

「お前の故国から側室がやってくる」

……どうやら私のことのようです。まあ皇子がこの部屋で話しかけるのは私か侍女だけで、侍女はシュザンナではないので私以外はありえないのですが、呼ばれていると気付けないので「？」となり、口を挟む機会を失う。

それにしても私の名前、そんなに覚え辛い名前じゃないんですけれど……皇子に覚えて欲しいと思いはしないので、それはそれで良いのですが。

故国からやってくるのは従妹の姫。王女さまの代役に選ばれた方がやってくるとか。

従妹の姫さまにこの地位を譲れと？　それは良いですねと思ったのですが、どうやらそうではなさそうでした。

ただ来ることを教えただけ。そして部屋を出て行きます。皇子の思うところが分からないので私は黙って見送りです。

することがない暇な私は、後宮を観察するのが日課になりつつあります。側室の方々の生活を見ていると、とても真面目。

どの側室も読書家でいらしゃって、宝石よりもドレスよりも本のほうが良いのだそうで。舞踏会など開かれず、皆実家で政治などの学問を教え込まれ、贅沢は敵だと育てられ。後宮って想像よりもずっと地味だなと呟くと、

「一時期流行ったんですよ」

侍女が笑いながら教えてくれた。
ここ五十年くらい王の心を射止める女性は「小国の姫。女騎士。侍女。取り立てて美人ではない。読書好き。派手な物には興味がない。質素倹約。控え目あるいは男勝り。剣が使える。知性派」そして何より重要なのは【皇后になるつもりなんてありません】という態度なのだそうだ。
貴族や王族も馬鹿ではないので、ならば王の心を射止めるために娘を「そのように」育ててるとして……結果、後宮は下手をすると下町よりもぼそぼそした感じになっている。
全体として地味。私の故郷よりも地味。
だって誰一人としてお茶会なんて開かず、ただ黙々と土いじりをしたり、本を読んだり……ここは修道院ですか？　と言いたくなるような静けさ。
侍女も以前は一人に十数名つけられていたのだが、質素を尊び気付いたら一人に一人。

物語に登場するような華やかな世界ではない。

私の所にわざわざ嫌味を言いに来た大国の姫はかなり浮いている模様だ。こんなぼそぼそとした所で気を張っていると思うと少し労りたくなるので、私は今日も大国の姫から悪口を黙って聞く。

私の名前をしっかりと覚えている大国の姫の悪口を聞きながら思ったことは、皇子のお母さまも地味な人だったのかなあ？

大国の姫が帰ってから、侍女から流行りの「選ばれる女性」について、詳しく聞いてみた。
「お妃さまは”沿った”御方ですよ。元侍女ですし……」
私は元侍女で取り立てて美人じゃないものね。言葉を濁したことについては聞かなかったことにしておく。

そうか私と皇子の噂が広まったのは、流行りに沿っていたからなんだ。世の中の夢見る少女にとっては歓迎するべきことなのかもしれないが、私にとっては迷惑な風潮だ。

ついでと言っては駄目なのだろうけれども、皇子の生母も”沿った”人だったのかと尋ねたところ、

「お美しい方だったそうです。美貌を王が認めて側室に」

おや？　綺麗なのか。

だがどうやら美人は三日で飽きるを王が地でやってしまったようで、連れてきて数度手を出してあとは放置、そして生まれたのが皇子。

「美人はいつも平凡顔を恐れています」

なんとも大変なことだ。貴族さまたちの世界がそんなことになっていたとは知らなかった。

……でも、何となく解った。王女さまが側室の一人になれたのは、顔が普通で小国の姫だったからだ！　なんと失礼な……失礼なのは私か。

パーティーが開かれ私も出席することに。その会場にいたのは、これもまた地味なご夫人方だった。どの方も知的さを前面に出し、数名は男装していたりと……。

私一人だけもの凄い豪華なドレスで、目立って仕方がなかった。

そうか王が地味目な普通顔で真面目を選ぶから、家臣もそれにならってこうなるんだ。恐いなあ。

その会場で一人すごく綺麗な女性を見かけた。

他のご夫人方のようにシンプルな地味な色のドレスを着て壁際に立っている方。綺麗な黒髪に白い肌に、銀色のこれもシンプルなネックレスが映えて、本当に美人だった。

パーティーが終了し部屋えと戻ってから侍女に、あの人は誰かと尋ねたら侯爵令嬢なのだそうだが……綺麗なので嫁の貰い手がないと。

「正確に言いますと、侯爵が”どうせ嫁いでも、後からきた身分の低い不細工に追い出されるのだからどこへも嫁がせぬ”と仰って、結婚させてもらえないそうです」

どんだけ平凡顔の読書家質素信仰が浸透しているのだ。

「今の所身分の低い者は美しい女性を妻にしていますが、美しい妻＝女を見る目がないと言われる世の中なので、出来る限り普通で地味目で散財を嫌う女性を欲しがりますね」

そう教えてくれる侍女の顔を見る。侍女は美人と普通の中間くらい。

後宮で良い人を見つけるのは、ちょっと難しいのかもしれない。

――　うわー見えないところでしてくださいよ、皇子

侍女と話を終えて寝る準備をして出窓に座って風景を見ていたら、皇子と侯爵令嬢が抱き合っている姿を発見。

――　見えるところで逢い引き中なので、かぶりつきで見させてもらいますよ皇子

木が生い茂って隠れるに適していると思っているのだろうが、私の部屋寝室からは丸見え。せっかくなので下世話に窓に張り付いて二人の逢瀬を凝視する。

月明かりの下、美貌の男女が抱き合っている姿は絵になる。女性のほうが涙を流しながら抱きつくさまは、私が憧れた世界そのもの。

二人は離れ難そうにキスをして、その場を去った。いつの間にか背後にいた侍女も私同様、窓にかぶりつき。

「身分も家柄も問題ありませんが、美人ですからねえ」

可哀相過ぎる。

「なにより皇子はお妃さまを迎えたので……侯爵は許さないでしょう」

私が普通だから美しい侯爵令嬢では勝てないと言うことですね。過去、どれほどの美女が地味女に敗北したのか？　想像するだけで怖ろしい。

皇子のことはまったく尊敬申し上げていない自業自得だとは思えど、少しだけ憐れには感じた。恋した相手が美人だから妻に出来ないだなんて。

［03］ヘッセニア，ペネロペ，シャキラ，カンデラス，ユリアーネ，エスメ

気付いたら故国から従妹の姫さまが後宮入りしていました。
こんな場合はお茶会に呼ぶべきなのだろうか？
「……話を聞いていらっしゃいますの？　貧しい家柄の出のお妃には、話が難し過ぎたかしら？」
大国の姫は呼ばなくても一日おきにやってきてくれるものの。
大国の姫の故国の自慢話ばかりですので、難しくはありません。
でも”難しくない”と訂正する気にもなれませんし。
しかし今日も今日とて元気な方だ。
話は尽きないようでなので語らせておくが、私は暇なので目の前の大国の姫を観察してみることにする。
大国の姫、身長は私より高くて、体重は見た目だけでは解らない。
細からず太からず、くびれるところはくびれ、出るべきところは出ている。ただしお尻は解らない。椅子に座っている時に後ろ側に回るわけにもいかないし、妃として頂点に立っているので彼女の後ろを付いて歩くこともない。
大国の姫らしく、肌は白くて透き通るようで顔の作りも上品。
綺麗というのなら侯爵令嬢ですが、可愛らしさがあるのはこの大国の姫。全員を知っている訳ではないけれど、後宮にいる側室の中でもっとも可憐で美しい……美しい？　あれ？
どの国もこぞって不細工を後宮に送り込んできているのなら、この大国の姫の容姿は異質だ。
いつも聞いている素振りでまったく聞いていなかった話に耳を傾ける。なにか重要な事が聞けるか？　と思ったが、そんなことはなかった。
解ったのは四人姉妹の次女だってことだけ。もう少し、実のある話をして欲しいものです。

「ヘッセニア」
侍女も私もヘッセニアという名ではありませんよ皇子。二人とも一文字も名前かすってませんって。
皇子の適当さ加減を蔑みつつ、話を聞くことに。
皇子も私と話などしたくはないでしょうが、なにせ皇子の寝室は私の部屋を通り抜けないと辿り着けない作りになっているので、どうしても顔を合わせることになる。
無視して通り過ぎてくれて構わないのですが、声をかけてくる。
声をかける前に、名前を覚えてこい！　……別に言いたいわけではない。適当に覚えておくといいと思います皇子。
私は皇子と食事中。
後宮で食事を取る場合は、妃の部屋以外は禁止なのだそうですよ。
無言のまま皇子と食事するのは構わないのですが、
「なにか聞きたいことなどあるか？」
初めて話題を欲しいと話をふられたので、大国の姫について聞いてみた。
「知らん。あの女のところには通わないつもりだ。あの女もその条件に納得して後宮にきたはずだ」

触れないのに側室？

皇子が部屋に戻ってから侍女に何か知っていることはないか？
聞いてみたら、知りたいことは侍女が全部知っていた。
「四人姉妹のなかでもっとも美人な方です。美人なのでご両親である大国の王も嫁に出す気はなかったようですが、本人が希望してやって来ました。ご本人が美人だから許したのでしょう。当国とは同盟関係にありますし、跡継ぎが生まれたほうが問題になりますから、このまま何事も無く手折られない側室のまま終わるのは確定ですね」

可憐な美人なのに可哀相なことで。ところで問題があるってどういう事だろう？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「継承権を持った子が外国で誕生すると厄介ですからね」

私の部屋にやってきた皇子の従兄が、大国の姫が触れられない理由を噛み砕いて教えてくれた。

本日いきなり挨拶に来て、そのまま居座って茶を所望した従兄殿。話すこともないのだが、なにか話さないと帰りそうにもなかったので聞いてみたのだ。

「貴方はご自分が元侍女であることを気にしているのですか？　後宮は基本身分のない女が入る場所ですし、下手に身分のある姫が子を産むと王位継承権が複雑になるので、誰も良い顔をしません。私は陛下の姉を母に持ち皇位継承権を持っております。同じことが後宮でも言えます。後宮に姫を入れて、その方が子を産むと当国の皇位継承権と他国の王位継承権を持った子が誕生するのです。その子が他国へと帰り王位を継いで、当国に跡取りが生まれなかったらどうなります？　他国から来てもらわなければならなくなるのです。その方が側室の子でしたら国内に残っている私のような立場の者を戴くことも可能ですが、正妃の子であったら他国にいる王子のほうが継承順位は上になりますから」

美形だが”気障”な感じのする従兄殿は話続ける。

「大国相手ですとぶつかりますが、小国相手でしたら後継者を得た時点で簡単に併呑できますから。物語が小国の姫や侍女が多いのは、利害関係上、大国の姫は後宮入りしないからです。後宮にいるのは小国の姫や侍女が圧倒的に多いので、必然的に正妃は後ろ盾の弱い

女性になります。ですからお妃が言われた彼女は、かなり浮いています。彼女以外の容姿が優れていないペネロペ王女やシャキラ王女、カンデラス王女がやってきた所で同じことでしょう」

従兄殿は私の質問に答えてから、

「明日お迎えにあがりますので」

有無を言わせずに言い、招待状を私に握らせて去っていった。

私は彼の見送りもそこそこに招待状を開き”なんの招待状なのか？”を確認する。

皇帝夫妻からの招待状だった……彼、これを届ける使者だったのか。なんてよく喋る使者なんだ。

夜半にやってきた皇子に招待状を見せて、どうするべきかを尋ねた。皇子は眉をつり上げて舌打ちをしたが、

「拒否はできないな……明日か。私が用意はさせておく、ユリアーネ」

招待は受けることになった。

そして私の名前はユリアーネじゃないって。名前、本当にかすりもしない。ついでに皇子に大国の姫とその姉妹の名を聞いたら、

「ペネロペ、シャキラ、カンデラスだ。後宮にいるのはエスメラルダ。それがどうした？　ユリアーネ」

間違えずに答えやがった。

皇子は名前を覚えられない病気かと思っていたが、どうやらそれは私だけに対してかかる病気のようですね。

［04］クリスチーナ，マーヤ，エリヴィラ，メアリー

翌日――

「用意は整えた」

皇子は国王夫妻への面会に必要なものを整えてくれたが、

「一人で挨拶してこい、クリスチーナ」

同行はしないのだそうだ。

そして今日も朝から名前間違い。だから一文字もかすってないっての。

国王夫妻の使者としてやってきた従兄殿が、それは喋り続けてくれる。私の緊張を解すというよりも、彼は話すのが好きなのだろう。

「そう言えば、貴方の故国からやって来た姫が新しい侍女を雇い入れました」

建前上、皇子の後宮の主である私ですら知らないような、本当に些細なことまで本当によく知っている。

細い顎と白い肌と、亜麻色の髪と……なんとも信用できない風貌だ。従兄殿の情報の裏を取って正しければ、今後は従兄殿からも情報入手することを考えよう。

皇帝夫妻が待つ部屋は……地味だった。

後宮の私の部屋のほうが派手で豪華だ。皇帝はなかなかに格好良い男性だが、

「会えて嬉しいわ」

声をかけてきた女性は地味だった。

着衣もかなり地味だけれども皇后陛下……だよね？　着衣も容姿も地味だと悩まされるなあ。部屋の奥のほうに美人が居る。若い美人じゃなくて年を取った美人。

なんだろう……どこかで見たことあるような。

皇帝が”皇子の生母”だと紹介してくれた。そうか皇子に似てい

るんだ！
皇帝夫妻はわりと砕けた感じのいい人でした。
皇后は皇子が皇帝になることを望んでおられるそうで。
「貴方ならきっと良い皇后になるわ」
話しぶりからすると皇后にも実子がいるようなんだが、やたらと皇子に肩入れしていて、奇妙な気持ちになる。

皇帝夫妻には嫌われてはいないようだが、皇子の母、姑さまには好かれてないようだ。

従兄殿同伴で姑さまとお話したのだが、とげとげしくてびっくり……はしなかった。従兄殿に送られ後宮へと戻ってから侍女に、故国の従妹の姫が新しく侍女を雇ったのは本当かどうかを尋ねた。
侍女は知らなかったようで、確認してくると部屋を出ていった。
私は堅苦しい正装を脱ぎ捨てて、ベッドに横たわり手足を伸ばそうと寝室へ向かう途中、またもや逢い引きしている皇子と侯爵令嬢を発見。
疲れていたのだが、なんかこう……楽しそうなので、今日もかぶりつきで見ることに。
侯爵令嬢、今日は男装していた。
でもその美しい姿は男装するとより一層目立つ。光沢があり艶々の黒髪を皇子が掴み、赤い紅を塗った唇に触れる。

いいですねー。私は姑さまに嫌味言われて帰ってきたというのに、皇子は美女とお楽しみですか。

帰ってきた侍女と一緒に二人の逢瀬を眺めながら、集めてきてくれた情報を聞いた。従妹の姫はやはり侍女を新しく雇っていた。
この国の後宮は侍女は一人につき一人と決まっているので、前任者はとうぜん解雇。

新しい侍女がどんな人なのかまで情報を仕入れてきてくれた。
「髪は茶色味を帯びた赤毛で、背は低く、主とよく似ています。喋る言葉のアクセントからしても同国人のようです」
あれ？　駆け落ちした王女さまも茶色味を帯びた赤毛で、身長が低めで従妹の姫とよく似ていたよね……。

「皇帝夫妻はお前のことを気に入ったようだ、マーヤ」

だからマーヤって誰だっての！　私はマーヤじゃなくて！　それよりも、従妹の姫のところに侍女として王女らしい人が居ることを皇子に伝えた。
皇子は昨日皇帝夫妻からの招待状を見たときとはまた違う渋い表情をつくり、食卓に部下の女騎士を呼び何かを耳打ちした。
皇子に付き従っている女騎士を間近で見たのは初めて。
プラチナブロンドの髪は女性とは思えないほど短く切りそろえられている。短髪は彼女の顔に合っているが、伸ばしてもきっと似合うだろう。
女騎士は心得たとはっきりと解る表情になり、礼をして立ち去る。
私たち女性とは違う動き、でも男性とも違う、鍛えられた女性のみができる動作。
それはともかく皇子。
唇が少し赤いです。皇子らしからぬ血色の良さです。食事をしていると段々色が取れていきますけれども。
そうか、誤魔化すためにここで食事をとっているのですね！

「……本当か？」

悪口ではありませんよ、皇子。
事実ですから。姑さまがわざとお茶を零して、私のドレスに染みをつくってくれたのは。皇子が送ったドレスだと知りながらの仕業

です。
「そういう人かもしれないな」
皇子はマザコンではないようで。それどころか部外者で厄介者で、名前もちゃんと覚えていない私の意見を簡単に信じるとは、仲悪いのでしょうかね？
知ったことではなく、その程度のことは耐えられるので。
「気にならないと言うのか？」
実家も同じような感じだったんですよ。
父親とその母親、私から見たら祖母が同居していて、それは性格の悪い婆さんでした。父親のことをいつまでも息子扱いで、父親も息子扱いされて喜んでいるような、母親が婆さんに虐められているとき庇いもせず、むしろ一緒にいびるような。
結婚なんてするもんじゃない、どうしても結婚しなければならないのなら、夫の母親、もしくは両親が死んでいるのを選ぼうと。いびる婆さんと尻馬に乗ってる幼稚な父親に堪忍袋の緒が切れた母親は離婚して街へ出て、お屋敷のお手伝いの仕事を得て、私を育ててくれました。
お屋敷の女主人は姑さまや婆さんと同じような性格だったが、金がもらえるのなら我慢はできる。
我慢して働いて、その縁で私は下働きながらお城へと入り……思えば姑の性格が悪かったせいでお妃になり、お妃になった先でも性格の悪い姑さまと遭遇し……。
やっぱり結婚なんてするもんじゃないですね。
皇子は食事を終えると部屋へと戻られました。
「ではな、マーヤ……私が対処する」
だから私はマーヤじゃなくて、そして皇子は何を対処するのですか？
頭がよろしくない私にはさっぱりと解りません。

私と皇子はなんとも清らかな関係。皇子は早い段階、私の故国の城を出たあたりで冷静になり、私と別れることを念頭に置いているので触れはしない。
皇子の好みがあの美しい侯爵令嬢なら、納得できるというもの。もしも私の部屋に渡っていたら、出窓から自分たちが逢瀬を楽しんでいる場所がもろ見えであることを知ることができるのですけれども。私は教えてあげるつもりなどなく、今日も清らかに別寝室。

皇子、脳裏に侯爵令嬢を描いて元気にお休みください――皇子が消えた扉を見つめながらそう考える私の表情は、邪悪な笑顔に違いありません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

数日後――

「エリヴィラ。メアリーは新しく雇った侍女は、王女ではないと言っている」
あー。メアリーは王女さまの従妹だから、エリヴィラが私のことを指している……のかな？　話の流れかしらしてそうだよね。
私は王女さまの小間使いではなかったので、どのような方か詳しくは知りません。
皇子が問題だと考えるのならば、ご自分で探ってください。私には関係のないことですか……。
「メアリーがなにを企んでいるのか探れ」

探れといわれても……従兄殿に聞いたほうが早そうですけれども。私は私で調べてみて、なにも解らなかった従兄殿に頼ってみよう。

「話を聞いていらっしゃるのかしら」

今日も今日とて元気にエスメラルダ姫が訪れてくれました。メアリー姫に直接聞くわけにはいかないから……エスメラルダ姫がなにか知っていたら儲け物だ。

そう思って話を聞いたのですが、エスメラルダ姫ほどの御方になると、小国出のメアリー姫の動向なんて気にもならないようです。

「貴方のほうが地味顔ですからね。あんな普通過ぎる顔立ちが勝てるはずがありません」

メアリー姫すら視界にないのなら、侍女になっている王女さまなんて気付くはずもないか。顔が似ているからよけい気付かれないかもしれない。

なにも聞き出せなかったので、あとは彼女が喋るままに聞いていた。

「わたしは幼い頃から美しく、皆に泣かれたものです。もっと醜くなければ嫁ぎ先がないと。乳母はそれは心配しておりましたわ」

はいはい、たしかにエスメラルダ姫はお美しいですが、可愛らしい盛りに、そんなことを言われて育ったとは。私が住んでいた村では、美人はもてはやされたものですけれども。

「わたしは四姉妹で唯一美しく、姉のペネロペや妹のシャキラ、カンデラスとはまったく違う顔立ち。美しいと言われた先々代のお妃に瓜二つでなければ、母上は浮気したと思われたことでしょう」

先々代……その頃はまだ美人でも正妃になることができたのか。

昔のように美人を王妃という形に持っていけば、皇子は侯爵令嬢と幸せになるけれども、エスメラルダ姫は幸せにはならないな。

幸せにしてあげたいとも思いませんが。

「三人ともわたしが皇子の後宮に入ると聞いて、嘲笑ったわ。”あなたのような美しい人に、皇子が興味を持つはずない”とね。あの時の見下した表情！　悔しくて……思い出しても」

そんなことはありませんよ、エスメラルダ姫。皇子は美人好きです。好きというより大好き、いいえ愛してます。

エスメラルダ姫以外の方ですけれども。

しばらく故国にいる三人の姉妹がどれ程厚遇され、自分がどれ程辛い日々を送ったのかを聞かされた。誇張があるのかどうかは解らないけれども、

「私は三人の王女さまは、エスメラルダ姫のことが好きなのだと思いましたが」

私も侍女と同意見。

三人の王女さまは本心からエスメラルダ姫のことを気遣って「側室になるのは良いが触れない」と宣言した皇子の元へ行くなと言ったようにしか聞こえない。そして一生結婚しないで、城でお姫様生活を満喫するべきだと。

でも彼女はそう取れなかったんだね。

美人は褒められ過ぎて性格が歪むことは聞いたことあるけれども、あまりに美貌を嘆かれて好意を好意として取れなくなってしまっているのは……大変なことだな。

個人的な意見としては、エスメラルダ姫は故国に帰ったほうが幸せになれそうだ。

［05］ユスティカの三姉妹

ユスティカ王国は北に連峰がそびえ敵を阻み、南は開けており温暖な気候は農業に適しており、国内はもとより輸出できるほどの農産物が生産されている。西は大陸屈指の採掘場で良質な建築資材がふんだんに手に入る。

東は海に面しており海運業も盛ん。

どの産業がもっとも有名かと問われれば、誰もが西の石であると答える。

首都の王城は石で有名なユスティカ王国らしく、室内は総大理石造り。十二神が六体ずつ向かい合い掲げ持っている雄大な正門アーチを、金で飾られた馬車が通り抜けてゆく。乗っているのはエスメラルダ。彼女は隣国の皇子の側室になるために国を出ていった。

見送るのは両親と乳母と数名の侍女のみ。

エスメラルダの姉妹は見送ることはなかった。

アラバスター細工のランプ、小物入れ、ベッドに窓枠。大国の王女に相応しい部屋で、

「お姉さまが」

「お姉さまが」

シャキラとカンデラスが違いに抱き合い泣き崩れていた。

「お姉さま、どうしてお嫁にいかれるのですか」

「お姉さま、お嫁にいかれるのでしたら、せめて国内貴族と」

「大国の美姫は結婚相手の皇子に疎まれるのが世の常です」

「お姉さまはお美しいから、きっと惨い目に遭いますわ。お姉さまとどこかの娘と諍いが起きたら、皇子がしゃしゃり出てきて……」

「お姉さまの味方なんてして下さらないのよ。ぜったいに小国の姫や侍女の味方をするのよ」

「ブルーノだって絶対にそうよ！」

「カンデラス、ブルーノとは誰？」
「お姉さまはブルーノの後宮ではないの？　シャキラ」
「え？　私はマルティンと聞いたけれど、カンデラス……どちらにしても、お姉さま、帰ってきて」
「お姉さま、お姉さま」

シャキラとカンデラスは地味であった。
自分たちが地味なことは、幼少期からよく理解していた。周囲は美しくなくとも「読書家で派手な催し嫌いであればよい」と二人を育てた。
二人ともそのような育てられ方をしたので、社交的ではなく地味めで、図書室に篭もるような日々であった。
そんな華やかさから無縁の育ち方をした二人が、唯一王の娘として華やかさを感じられるのが、姉エスメラルダの側にいるとき。
二重まぶたの大きな青い瞳に、筋の通った鼻、小さい桜色の唇。アラバスターで飾られた室内に映える黒く艶やかな髪。青や紫色のドレスがよく似合う。
二人はエスメラルダのことが大好きなのだが、生来の口下手と人見知り、大好きな美しい姉ということで、話す時はいつも緊張してしまい言葉がうまく紡げず、会話が成り立たない。
「二人とも、まだ泣いているの？」
エスメラルダの部屋で泣いている二人のところへやって来たのは
「ペネロペ姉さま」
「姉さま」
長女であり婿を迎えてユスティカ王国を継ぐペネロペ。
ペネロペは泣いている二人を両腕で包み込むようにして、
「エスメラルダが帰ってくるまでには泣き止みなさい」
自身も泣きたいのだが、我慢して妹たちを励ました。
ペネロペは顔は二人の妹と同じく地味顔で、スタイルもさほど良くはない。脂肪がついて太っているのではなく、骨格が逞しくチョ

ーカーをつけることができないほどの猪首。
女性らしい華やかな格好に憧れはあるものの、逞しい体に女性服は似合わないと、いつも男性と同じ格好をしている。
「ペネロペ姉さま」
「お姉さま、いつ帰ってくるのですか！」
「それはまだ解らないけれど、きっと帰ってきてくれるはず。帰ってくるまで貴方たち二人は待つのでしょう？」
「待ちます！　お姉さまが帰ってくるまで」
「待たせてください、お姉さま！」

三人の王女は美しい大国の王女エスメラルダが後宮で皇子に蔑ろにされているに違いないと、心を痛めていた。

「ブルーノですよね、ペネロペ姉さま」
「マルティンですよね、姉さま」
「私はトビアスだと……」

娘を後宮に送った彼女たちの王も、なにもしていなかったわけではない。
皇子の不興を買ったら即座に連れ帰ろうと、後宮に前歴が侍女である娘を五名ほど送り込み、エスメラルダ付きの小間使いに指示を出していた。

――　エスメラルダが他の姫君に対し不満を募らせ、なんらかの行動を取ろうとした場合は、この五人に先手を打たせるように

こうしてエスメラルダは可もなく不可もなく後宮で生活を送っていた。
皇子も通わないのでそのうち飽きて帰ってくるであろうと　――
そして。

「皇子がロブドダン王国の侍女を妃に迎えたそうだ」

三人は父から伝えられ、侍女が妃になった経緯を聞き、エスメラルダの身を案じた。彼女たちが聞いたのは”皇子みずから侍女を国まで迎えに行った”などの表層部と”侍女は普通顔”という真実。

それらは彼女たちを絶望させるのに充分であった。

「お姉さまが妃に陥れられる前に助け出さないと」

「お父さま。お姉さまを連れ帰ってください」

「大国の美しい姫というだけで、裏で策謀を練っていると思われてしまいます！　妃になにかあったら、エスメラルダがまっさきに疑われてしまいます」

王は娘たちの意見を聞き、エスメラルダも皇子が妃を迎えたことで諦めもついたであろうと、正式に帰国の打診をすることに決めた。

［06］ロブドダンの従姉妹たち

メアリーは皇子に恋をしていた。
姿を見たこともなければ声を聞いたこともなく、ただ噂のみでの恋をした。
極寒の晴れた朝日のような冷たさを感じさせる銀髪の皇子。
物静かであるが口数すくないわけではなく、必要な意見はしっかりと言い、騎士団をまとめて、陣頭指揮をとり自ら剣をふるう。
その勇猛さは彼の秀麗な顔に刻まれていた。右額から口元の側まで縦に切られた傷が残り、右目も失われている。
血の繋がりのない皇后が息子をさしおいて次の皇帝にと推すほどの人物。
メアリーは従姉の王女が彼の側室になると聞いたとき、羨ましさを感じる余裕もなかった。
皇子が帰国途中、ロブドダンに立ち寄ると聞き、メアリーは皇子に一目だけでも会いたいと城へ。
「メアリー」
歓迎式に参加するまで、別室でまっていたメアリーの元に、伯父である国王が青い顔をして訪れたとき、メアリーは詩集を嗜んでいた。
「なんでしょうか？　伯父さま」
何を言われるのだろうか？　彼女は国王の顔を見つめた。
「駆け落ちした」
メアリーはなにを言われたのか解らず国王の顔を凝視する。
国王はそれだけ言い椅子に腰を下ろし息を整えて、最初から説明をした。
従姉の王女が騎士と駆け落ちしたと聞かされ、驚きさめやらぬメアリーに国王は身を乗り出して本題を告げる。
「クローディアに成り済まし、側室になってくれ」

メアリーの答えはもちろん、

「畏まりました」

拒否することなく、危うく”喜んで”と言いそうになるのを飲み込み引き受けた。

人生で最も幸せな時であったとも言える。だがその幸せな時は長くは続かなかった。

「娘のクローディアです」

国王から皇子に紹介され初めてその姿を間近で見て、メアリーは恋に落ちた。皇子の自己紹介を聞き終え、彼女が「クローディア」として皇子の手を取ろうとしたとき、侍女が現れ事実が明るみに出る。

「皇子、その方は王女ではありません！」

皇子に声をかけた侍女が連れてきた”侍女”

黒髪を後ろで一本にまとめた、長時間閉じ込められ、はれぼったくなった以外の特徴はない顔の”侍女”

触れようとした手は弾かれ、鋭い視線はメアリーではなく国王へと向けられる。メアリーは退出を命じられ、国王と宰相、そして王妃やメアリーの両親から事情を聞き皇子は激怒し、

「イザベルを妃として迎える！」

皇子は”侍女”を妃として連れていった。

皇子と”侍女”が去ったあと、国王は抜け殻のようであった。メアリーは王妃と宰相から感謝され、

「いまだから言えるけれど、あなたがクローディアに成り済まして後宮に行かなくてよかった」

両親に優しく抱擁された。
抱き締められながらメアリーは涙が溢れてきた。
側室になりたかったのになれなかった。それを誰も気付いていない　――
抜け殻であった国王は徐々に生気を取り戻し、娘の行動に激怒して、王籍を剥奪し国外追放を命じた。
国外追放を命じた国王にメアリーは、自ら側室になりたいと申し出た。
「ロブドダンを代表して側室になりたいのです。ロブドダンの代表が侍女というのは……」
メアリーの両親は難色を示し、
「お前の気持ちだけで充分だ、メアリー」
国王も引き留めたが、メアリーの意思は強固なもので、その熱意に負けて国王はラージュ皇国に側室希望の書状を認めた。
駆け落ち騒動のこともあるので拒否されるだろうと、そうしたらメアリーも諦めるだろうという希望的な観測で。
だが国王の楽観的な読みは外れ、ラージュ皇国側からメアリーを側室に迎えてもよいとの返事が返ってきた。

メアリーはラージュ皇国へと入り、側室となった。

皇子が会いに来ることはないが、お気に入りの側室がいないことは掴んだ。
定期的に足を運んでいるのは、メアリーが側室になるのを阻んだ”侍女”現在の妃だけ。憧れた皇子の後宮に入ることはできたが、嫉妬の対象である妃も近くにいる。
皇子は通ってくるので後宮にいる時間は少ないが、妃や側室は一日中後宮にいるので嫉妬は募りやすい。
同じ空間にいると息がつまるとメアリーは許可を取り、街へと出た。

かつて後宮にはいった女性は死ぬ迄外界と遮断されたが、三十年ほど前から街へ出ることも許されるようになっていた。

「メアリー！」

名を呼ばれ振り返ると、そこにはメアリーによく似ている女性が、みすぼらしい格好をして立っていた。

「……」

「お知り合いですか？」

護衛の女騎士に怪訝そうに尋ねられ、首を振り否定してから、

「でも私の名前を知っているから……私が忘れているだけかもしれない。少し二人だけで話をしたいから、ゆっくりと話ができる場所に案内して」

会うことに。

「畏まりました」

クローディアは騎士との蜜月も終わり、駆け落ちに後悔する日々が続き、騎士と喧嘩し家を飛び出して街を彷徨っているときにメアリーと出会った。

「ロブドダンに帰りたいの」

メアリーは薄汚れたクローディアを見ながら、さまざまなことを考え——

「お金を貸すことはできないわ。もちろん迎えを呼ぶことも」

「じゃあ私はどうやって帰ったらいいの？」

「お金を稼ぎなさい。私が侍女として雇ってあげるわ、クローディア……いいえ今日からクロードと名乗りなさい」

「私が侍女ですって！」

「そうよ」

「冗談じゃない……」

「じゃあ街で”私は駆け落ちして捨てられたロブドダンの王女です

”と叫んで歩くつもり？」
「私が彼を捨てたのよ！」
「その薄汚れた格好で言って信用されると思うの？」
「お父さまに連絡……」
「いやよ。私はあなたの為に何もするつもりはないわ。あなたが私の為になにかをなさい」

メアリーは女騎士に嘘をつき、
「知り合いではないけれども同国人でした。帰国するための資金を稼がせるために、侍女として雇おうと考えているの」
クローディアを侍女として雇い入れた。

［07］フランシーヌ

「クロードのことですか」
メアリー姫とクローディア王女の動向を探れと皇子に命じられたものの、元侍女、それも洗濯専門であった私はそんな特技は持ち合わせていないので、噂話に強そうな従兄殿をお茶会に招待することにした。
従兄殿は私が聞きたいことを心得ていた……それはそうだ。メアリー姫が新しい侍女を雇ったと私に教えてくれたのは、この人なのだから。
「メアリー付きの女騎士から侍女として雇いたいと申し出がありました」
私がなにも尋ねなくても、従兄殿はそれは滑らかに語り続けてくれる。
聞けば”侍女クロード”はまったくの役立たずで、仕事らしい仕事ができないのだとか。お茶を淹れたりすることくらいは出来るが、「王女の側で行われることは解りますが、王女の生活の裏方、あなたのかつての仕事、洗濯のようなことはあまり理解はできないようです。駆け落ちし、二人きりで生活していたのでまったく知らないわけではないようですが」
裏方の仕事なんて見たことないでしょうよ。
私だってクローディア王女の姿見たことなかったもの。
「元騎士が仕事をして日銭を稼ぎ、生活の細々としたことも全て引き受けていたようですが。仕事の前後に食事支度に掃除洗濯は苦労したようです」
ええーその程度の騎士なの？
元騎士なのに、その程度で音を上げたの？　信じられない。
私の母親はそれに子育てまでしていたけれど、音を上げたことは一度もなかった。元騎士精神力弱くて、手際悪いんじゃないの。

クローディア王女と駆け落ちするときに、覚悟は決めてたんじゃない……覚悟を決めても上手くいかないことはあるね。
私の母親があの腐れ父親と結婚したのも……うん、人間は誰しも間違いはあるね。
結婚する前から性悪婆さんだって解っていたのに、腐れ父親を信じるから。
結婚するときは両目でしっかり、結婚したら片目だけで相手を見るようにと、あれほど言われているのに……片目と言えば皇子は本当に片目だけれども、あの顔の傷がなければ……薄っぺらい美形顔だよね。従兄殿みたいな。
あの傷があるから、重みと影がある美形になっている。
「企み……ですか？」
ロブドダンの王族がなにかを企んでいるのか？　――この質問に、従兄殿は目を細めて口を半開きにして、なんとも言えない笑い顔を作った。
企みを含んだ半笑い……かな。
「探ろうとしないほうがよろしいでしょう」
私は探りたくはないのです。
皇子が探れと言っているのですよ。面倒なので従兄殿に頼んでいいですか？
「そのうち探るなと言って来ることでしょう」
探れと言われると面倒だが、探るなと言われると……気楽でいい。早く”探るな”と命じて欲しいなあ。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「メアリーとクローディアには近付くな、フランシーヌ」
従兄殿は予言者ですか？
そして相変わらず私の名前間違ってる。

覚えて欲しいという気持ちはないけれども、話しかけられた時に少し反応が遅れてしまい、会話ができないので。

会話したいとは思わないのですが、反応できないのも事実。

従兄殿のことを尋ねてみようと思ったのですが、フランシーヌでいつも通りタイミングを逃してしまい、皇子の会話を聞くだけに。

「クローディアに近付いた者がいる。その男はお前を害する恐れがある。解ったか？　フランシーヌ」

フランシーヌ以外は解りました。

そして聞きたいのは「クローディア王女＝侍女クロード」は確定なのですか？

私はそれに関しても調べられませんでしたが。

「近いうちにメアリーの両親がラージュに来る。その際に確かめさせる」

皇子は着々と調べを進めているようで。私の名前を間違ってばかりなので、噂とは違い頭が弱い人なのかと思っていましたが、そんな事はなかったようで、ラージュ皇国が滅びることもなさそうですね。

「フランシーヌ。お前の護衛を用意した」

皇子に唐突に言われて、なんのことか解らなかったので、皇子が部屋に消えてから侍女に聞くと、

「女騎士です。後宮の女性には女騎士がつくのですよ」

私よりも賢い侍女がさくさくと説明をしてくれた。

それによると――　以前後宮は一度入ったら二度と出ることはできなかったが、三十年ほど前に後宮に剣が上手で闊達な娘が側室となり、その娘が当時の皇子さまと愛を育みつつ、後宮に女性を閉じ込めておくのは善くないとして、外出が許されるように尽力して今

の後宮になったのだと。
　でも三十年前というと皇帝と皇后が該当する頃だと……皇后は闊達で剣の達人には見えなかったけれども。
「その方は若くして亡くなられました。その方の侍女であったのが皇后さまです」
　皇帝、なんか色々手近で済ましすぎのような気がするのだが。
「この話はあまり語らない方がいいでしょう。それと言うのも、剣が上手だった側室の実家は騎士団長を何人も輩出した名家でした。亡くなられた方には十歳ほど年上の兄がいらっしゃり、騎士団に属し皇子の剣の師匠でもありました。その方は副団長を経てそろそろ団長の座に就いてもよいのでは？　皆がそのように言っていた頃に、突如このラージュ皇国を裏切り……皇子の顔についた傷はその方がつけたものです」

　なんか一気に重い話になったね。

「皇子は信頼していたその方に裏切られて、かなり深い傷を負ったようです」
　心と体の両方に深い傷を負ったわけですか。
　それにしても、裏切った理由は何なんだろう？
「それについては私も知りません。ただ家族運のない方で、ご両親を早くに亡くし、年の離れた妹と娘を後宮で亡くし、奥様も若くして病死なさった方です」
　家族運がないのか、その方が死を招く疫病神なのか？
　……疫病神だよね。だってラージュ皇国を裏切り皇子の顔に傷ってことは、
「その方が寝返った国は滅びました」
　間違いなく、その方が死を招く疫病神だったのだろう。
「皇子はその方を実の父のように慕い、後宮に側室として入った娘と皇子は兄妹のようでした。男女の情愛はなかったのですが、本当

に仲の良い兄妹に見えました」

なぜ侍女がそのことを知っているのかな？

「私が以前お仕えしていたのが、その方なのです。その関係でいまの話も知っているのです」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3763z/

私の名を呼ぶまで

2012年1月4日07時49分発行